

CISMOR Young Scholars' Workshop
CISMOR 一神教学際研究会 2022-2

2022年11月12日(土) 13:30~16:25
オンラインワークショップ (ZOOM platform)

プログラム

司会：鍵谷秀之 同志社大学一神教学際研究センター特別研究員

13:30-13:35 開会の挨拶 アダ・タガー・コヘン
同志社大学神学研究科教授、一神教学際研究センター長

<発表>

(発表 20分 コメント 10分 コメントへの回答およびフロアからのコメント 10分)

13:35-14:15 久保田昌弘 ルードヴィッヒ・マクシミリアン大学ミュンヘン 福音主義学科博士課程
「ルカ文書における悪魔論の問題点」
コメンテーター 浅野 淳博先生

14:15-14:55 辻坂真也 同志社大学神学研究科博士後期課程
「王権の表象—古代メソポタミアを事例に—」
コメンテーター 柴田大輔先生

14:55-15:00 休憩

15:00-15:40 山中弘次 同志社大学神学研究科博士後期課程
「坂田祐(たすく) 一元騎兵隊小隊長が守り抜いたキリスト教主義教育」
コメンテーター 塩野和夫先生

15:40-16:20 何懿亭(カ イテイ) 同志社大学神学研究科博士後期課程
「『辨学章疏』における徐光啓の護教論に関する考察」
コメンテーター 城地 孝先生

16:20-16:25 閉会の挨拶 アダ・タガー・コヘン
同志社大学神学研究科教授、一神教学際研究センター長

【コメンテーター】

浅野淳博 関西学院大学 神学部 教授

柴田大輔 筑波大学人文社会科学部 教授

塩野和夫 西南学院大学国際文化学部 教授

城地孝 同志社大学文学部 准教授

*メインコメンテーターを指名させていただいておりますが、他の方の発表へのコメントも歓迎いたします。

要 旨

久保田昌弘

「ルカ文書における悪魔論の問題点」

本研究の目標はルカ文書における悪魔論を明らかにすることである。本研究での悪魔論の研究対象は、ルカ文書における悪魔や悪霊の基本的な特徴や役割、存在意義だけでなく、それらに対する救済論がどのようなものであるかをも含んでいる。今回の発表では、ルカ文書における悪魔論が基本的にどのように考えられてきたかとそれに対する発表者の批判を紹介する。それにより、ルカ文書の悪魔論の問題点を簡単に紹介する。

辻坂真也

「王権の表象—古代メソポタミアを事例に—」

王権の象徴は、様々な文化において、多様な形態を取るものの、玉座 (Throne) はその中でも最も重用されたものである。古代メソポタミア、特に紀元前三千年紀末期のシュメール人の社会においても、笏や王冠と並び、玉座は王権の象徴として用いられていた。本研究は、玉座が、メソポタミアにおいて王権の象徴に用いられるようになった背景を、玉座が伝統的に持っていた機能や力、そして役割を、図像、及び文書史料両方から再検討するものである。

山中弘次

「坂田祐(たすく) —元騎兵隊小隊長が守り抜いたキリスト教主義教育」

坂田祐は関東学院の創立者である。元会津藩士の貧しい家に育ち、陸軍に入隊。騎兵隊小隊長として日露戦争で勲功を立てた。出征前にキリスト教に出会い、復員後、人を殺す軍人より人を生かす教育者になりたい、と関東学院の初代院長に就いた。坂田は、15年戦争期のキリスト教主義学校への圧力の下でも、終始、毅然としてキリスト教主義教育とそこに学ぶ学生を守り抜こうとした。本発表では、内村鑑三との子弟関係で育まれた坂田の信仰と、苦境の中でも超然と貫かれたキリスト者としての戦いの姿勢を明らかにする。

何懿亭 (カ イテイ)

「『辨学章疏』における徐光啓の護教論に関する考察」

1616年、中国ではキリスト教弾圧事件（「南京教案」）を起こった。こうした事件に対して、すでに改宗した明朝末期の中国知識人の徐光啓（1562-1633）は、皇帝への上奏書『辨学章疏』を書き、自分のカトリック信仰を承認したと同時に、キリスト教を弁護した。このことを踏まえ、本研究は『辨学章疏』を研究対象にし、その内容の解読と分析を通じて、この上奏書における徐光啓の護教論を考察しながら、明朝末期の中国人改宗者によるキリスト教理解を明らかにする。

以上